



第7回

これまでの“I”見聞録と今後の予定について

中川晋一 (独)情報通信研究機構

昨年 50 巻 8 号から、会員諸兄に突然何の断りもなく開始したコラム “I” 見聞録だが、51 巻 1 号の新井イスマイル氏の Pervasive 2009 で第 6 回目となった。その間取り上げた題名と今後本コラムで取り上げる予定のカンファレンスについて表 -1 に示す。今回、第 6 回の区切りとなり、編集担当者を代表して関係各位の多大なご協力によってコラムとして安定してきたことに感謝し、会員諸氏に本コラム運営の基本的な考え方を示す。この場が読者参加型の情報交流の場としてさらなる発展をすることを期待する。

本コラムの背景と動機

まず、このコラムの動機について述べたい。リーマンショックが起こった 2008 年、会誌編集でまず心配したことは、「来年度以降 NAB, CES, 我が国では INTEROP などの展示会が不況の影響を受け、開催すら危ぶまれる状況になるのではないか？」ということであった。これらの大規模な見本市や展示会は、放送や IT 産業を標的とする情報処理学にとって最終生産物の動向を示す場である。巨額な資金が流動することもあり景気の影響を大きく受ける。前回の 1990 年代後半の不況のとき、インターネットは成長過程にあった。そのため、IT 産業やインターネットという新規産業は直接不況の影響は受けなかった。むしろ就労人口の吸収先として期待されたくらいであった。今回の状況はまったく反対である。これらの展示会やカンファレンスが研究者のみならず、若手技術者にとっても、所属する組織の最先端技術を展示することによって実地経験を積むための場として重要であり、展示会の規模縮小が彼らの活躍の場を奪うことが予想された。またこれらは、IETF での標準化提案の動向も直接影響をうけると考えた。そのため、これらの大規模カンファレンスや標準化会合の今を、できるだけ早く会員諸氏に情報提供しておかなければと考え、開始する

| 回数 | 題名 | 執筆者・執筆予定者(敬称略) |
|----|--|----------------|
| 1 | NAB 2009 | 熊谷誠治 |
| 2 | ShowNet / INTEROP 2009 | 重近範行・中村 修 |
| 3 | 第 75 回 IETF (Internet Engineering Task Force) meeting | 新 麗 |
| 4 | SIGGRAPH 2009 | 森 博志 |
| 5 | SIGCOMM 2009 | 長健二郎 |
| 6 | Pervasive 2009 | 新井イスマイル |
| 7 | これまでの “I” 見聞録と今後の予定について | 中川晋一 |
| 8 | 第 76 回 IETF (Internet Engineering Task Force) meeting in Hiroshima | 前田香織 |
| 9 | Haskell ナイト | 竹辺靖昭 |
| 10 | SIIT 2009 | 小林亜樹 |
| 11 | ウェブ学会 | 岡本 真 |
| 12 | Twitter 研究会 | 西谷智広 |
| 13 | SIGGRAPH Asia | 宮田高道 |

表 -1 “I”見聞録で取り上げた会合・会議と今後の予定

こととなった。

コラム執筆の方針

このような背景から、本会会誌編集委員会で従来の情報処理学会の会報や会議開催録などの報告ではなく取材記事として、実際に執筆者がそのカンファレンスに参加して感じたことを会員にフィードバックすることを提案した。コラムの方針として、情報処理学会の会員にとってなじみは薄い有益と思われる会合や学会への参加者の方(できれば論文が採録された人)に、その会の趣旨や実際の様子、可能であれば発表されていた内容から興味を持たれた内容をレポートしていただきたいという趣旨で原稿を依頼することになった。“I looked I felt and I thought…” という意味で、“I”見聞録”と命名した。対

象とする会合に関しては、学会にこだわらず世界的あるいは我が国で注目される会合であること、たとえマイナーな会合であっても会員諸氏にとってこれからの技術動向を速報的に伝えることを目的として取り上げることにした。

学術カンファレンスへの展開

さらに注目すべきと考えたのは、本会会員にとって関係する学術会議でありながら、論文が採録されにくい国際会議である。これまで本コラムで取り上げたのはACM SIGGRAPH, SIGCOMMである。ACM SIGCOMMに関し、さらに驚いたのは本コラム第5回の長健二郎氏の記述にもあるように、この有名なカンファレンスに論文が採録された日本人は歴史上わずか3人しかいないことである。インターネット技術を議論するためのこの世界最高峰のカンファレンスに我が国から採録となっている人はいない。MobiCom 2009も我が国からの発表が少なかったと聞く。IEEE GLOBECOM, INFOCOMといったトップカンファレンスにも、やはり我が国からの発表件数は多くないと聞く。研究者として僕たちは大丈夫なのだろうかという危機感である。

人数から言えば、インターネットやコンピュータネットワークを専門としている研究者は、合衆国、中国、ヨーロッパに次いで恐らく我が国は少なくないはずである。プログラムを見るとMITやCMUといった超有名大学が並ぶ。そこには、残念ながら我が国の大学名も研究所の名前もない。ここまで完敗しているのはなぜだろう。少なくとも私の過去にかかわった医学の領域では、我が国の研究者は合衆国の研究者に対してここまでということを見たことがなかった。医学ばかりではなく、サイエン

スや化学の分野でも我が国の研究者は世界をリードしている。なぜ情報通信の分野でここまで水をあけられているのだろうか。これらの点をご考慮いただき、会員諸氏からの積極的なご寄稿をお願いしたい。

現在までの記事概要

以下、各回での記事内容の概要とコラム担当者としての掲載の意図について述べる。会員諸氏のご理解をいただければ幸いである。

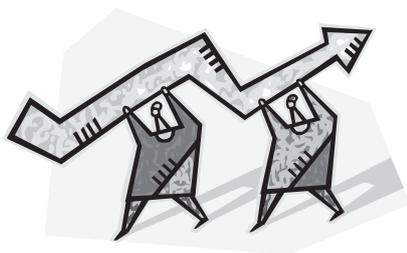
第1回 NAB, 第2回 INTEROP

第1回のNABは、合衆国で開催されるNational Association of Broadcastersの年次会であり、世界最大級の放送技術に関する展示会である。執筆者は、本誌にも通信放送融合技術、特にインターネット技術を用いた放送に関して執筆しているプロフェッショナルであり、2009年のハイライトは3D, 4k, 3G (3GbpsのSDI)であり、中でも3Dが注目されたことを報告した。

第2回の重近氏・中村氏にご執筆いただいたInteropは我が国で開催されるインターネット関連の最大の展示会である。表に見える展示とは異なり、彼らが構築するShowNetは、実際の生きたネットワークのトラフィックを用いてInteroperabilityとInterconnectivityの試験を行う実験の場であるという報告であった。このように本コラムでは、表面的な会議や会合の規模などではなく報告者の視点や主張を優先して下さるよう執筆のときに依頼した。

第3回 第75回 IETF

第3回の新氏のIETFのレポートでは、これまで本誌で取り上げられたことのなかった、標準化提案のうち進行のあったもの(表-1)を取り上げ、インターネット技術動向に関するポイントをレポートした。このリストは、どのRFCがprogressionし、何がobsoleteになったかということを知るために有益であると思われる。広島で開催された第76回IETFについても同様のリストを掲載していただけるように依頼中である。IETFに関してはインターネット技術の先端的議論となっているため、本会会員諸氏にとって専門的過ぎるとご批判をいただくことは覚悟の上だが、インターネット技術の動向にとって最も大きな情報の1つとなることを期待する。このように本コラムではIETFに関してはできるだけ定点観測とし



での情報を提供できればと考えている。

第4回 SIGGRAPH 2009, 第5回 SIGCOMM 2009

ACMの主催するこの2つのトップカンファレンスは、あまりにも有名である。レポートをご担当いただいた森氏、長氏に感謝申し上げるとともに、会員諸氏の Academic Paper への挑戦を期待する。なお、横浜で開催された SIGGRAPH Asia に関しても、2010年度内に取り上げる予定である。

今後の予定

現在本コラムで取り上げる予定は以下である。第76回 IETF 広島(3号)、Haskell ナイト(3号)、SIIT 2009(4号)、ウェブ学会(5号)、Twitter 研究会(6号)、SIGGRAPH Asia(7号)を予定している。このほかにも WWW をはじめとするトップカンファレンスへの参加者で執筆可能な方はぜひご提案をお待ちする。また今後、研究会や学会の話題に関するメタレビューも行いたいと考えている。“I looked I felt and I thought”と申し上げているが、現在形あるいは未来形も大歓迎である。情報処理学会会員の活躍の場、研究に対する話題提供の可能な

会合や会議や会合に関する“I”の見聞をご投稿・ご提案いただきたい。

最後に、会員諸氏へのお詫びとお願いである。

コラムの方針は決まったが、コラム開始までの期間の短さから、狭い人間関係の中で執筆をお願いせざるを得なかったことをお詫び申し上げる。また、IETF に関しては、他誌にこのようなサマリーがないこと、情報処理学会会員諸氏にとってなじみの薄い IETF の膨大な提案の中からエッセンスとして技術的価値を考慮ししばらく継続したいと考えるが、専門的すぎる内容を含むことについて会員諸氏のご理解を賜れば幸甚である。重ねて読者諸氏の旺盛なご提案、ご寄稿をお待ちする。

(平成 21 年 12 月 28 日受付)

中川晋一 (正会員) | snakagaw@nict.go.jp

(独)情報通信研究機構新世代ネットワーク研究センター主任研究員、お茶の水大学非常勤講師、次世代インターネット技術ならびに情報通信医学の研究に従事。医師。医博、本誌 CWG 主査。

